

資料渉猟余話

その113

鳥居などは朽ち果てたらしく見当たらないが、石垣の上に、拝殿・本殿・磐座(40人以上が載った写真もある)・社務所や矢場・ひょうたん池(石橋が架かっている、昭和14年の写真では斎田になっていたあたり)など思いの外、平らで広い。拝殿の石垣とその横の階段などの

馳せ集まる。そこには樺の根元に石組みの小さな祠が作られていた。奥の院だろうか。遅れて登ってきた長三郎さんが祠の前で跪いた。山に

山上の神殿、その後の調査

嶋 不 濁

生きてきた人は何も言わず、携えてきたお神酒を供えて掌を合わせた。40年ぶりの無沙汰を詫び、感謝の祈りを捧げたのだろう。山はこうした

人々の手で守られてきたのだ。拝殿や本殿は朽ち果てていたが、私たちが70年前の人たちと同じように記念写真を撮って、山を降りました。大杉章喜が山上に築き上げた「宮が、大杉がそこに現之本神社(大神)」の出したかったものはあつた場所はこうしこれから探られていて明らかになったかねばならない。



拝殿横の石段 昭和14年頃



70年前と同じ石組